

# いじめ防止を目的とした積極的な生徒指導の在り方 ～子どもと共に学級力を高める取り組みを基盤として～

栗東市立大宝小学校

氏名：久泉 嘉章

## I. 研究主題の設定の理由

### 1. 研究の動機

2018年から道徳の授業が教科化することになり、いじめの防止になると期待されているが道徳の授業だけでいじめがなくなるとは当然思えない。各校のいじめの実態を踏まえた上で対策を練らなければいじめを予防することはできないと考える。荻上氏は、著書「いじめを生む教室 子どもを守るために知っておきたいデータと知識」でいじめ等の問題が多い教室を「不機嫌な教室」、逆に児童の満足度が高く、いじめ等の問題が少ない教室を「ご機嫌な教室」と呼んでいる。様々な条件がそろうことで、「不機嫌な教室」や「ご機嫌な教室」が作り出される。いじめ対策においてこれからは、「発生したいじめに対応する」「いじめをしないように教育する」ばかりが全てではなく、「いじめが起きにくい環境を作る」「人をいじめに追いやる背景を取り除く」「何がいじめ対策に有効なのかを検証する」など様々な対策が必要になると述べている。

昨年度、学級担任をしながら初めて生徒指導主任を任された。5月をいじめ防止強化月間としてピンクシャツ運動について全校放送し、自分たちでいじめをなくそうと呼びかけた。しかし、問題が大きくなってからの対応が多く、早期発見し、適切な対応が取れなかったことを悔やんだ。今年度は、教務の生徒指導主任として自分が学級担任として実践してきたことを活かし、各学級の状況を把握し、どのようなアプローチができるか有効な手立てを検証していきたいと考え、本研究を始めることとした。

### 2. 研究の目的

昨年度のいじめ認知報告からいじめの態様を見ると、「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。」や「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり・蹴られたりする。」といったいじめ事案が多く見られた。これらの多くは教室で起こっている。つまり学級集団における人間関係や教室環境が正常かどうかを定期的にチェックし、適切な手立てを踏むことでいじめを予防できると考える。いじめ認知報告や学級力アンケートなどの数値的なデータをもとに、検証し、成果と課題を明確にし、今後の積極的な生徒指導に役立てていこうというのが今回の実践研究の目的である。

### 3. 研究の仮説

いじめ認知報告や子どもが学級について評価する学級力アンケートなどをもとに、いつ、どこで、どのような時にいじめが起こりやすいのかを分析し、適切な対策を講じることができれば、いじめや不登校、学級崩壊といった問題も未然に防ぐことができるだろう。

## Ⅱ. 研究の方法

### 1. いじめ認知報告の分析

本校のいじめ認知件数は昨年度が218件と市内で最も多い。いじめと認知されたいじめの事案の発生時期、発生場所、いじめの態様からいじめ予防の手立てを明らかにする。

### 2. 具体的な支援の在り方

いじめ対策は、予防→早期発見→早期対応→検証というサイクルで回すことが必要となる。昨年度のいじめ認知報告をもとに行った今年度の「予防の手立て」、「早期発見の手立て」が有効であったかどうかを検証し、次年度のいじめを予防するためにできる有効な手立ての方向性を示す。

### 3. 「ご機嫌な教室」と「不機嫌な教室」の特徴を分析

学級力アンケートや「かわさき共生\*共育プログラム」の効果測定といじめ認知件数からご機嫌な教室と不機嫌な教室の違いを明らかにする。

#### (1) 学級力アンケートについて

学級力アンケート（資料1）については、附属新潟小学校のHPよりダウンロードしそのまま使用した。附属新潟小では毎月、アンケートを実施されているが、本校では、年3回実施することとした。5月、9月、12月の各学級で実施されたアンケートを生徒指導主任が集計した後、アンケート結果を担任に渡し、アンケート結果の見方の説明を行う。

#### (2) 「かわさき共生\*共育プログラム」の効果測定について

「かわさき共生\*共育プログラム」は、川崎市で人間関係形成のための指導資料としてGWT（グループワークトレーニング）やSGE（構成的グループエンカウンター）などの学習理論をもとに作成されたものである。そしてそのプログラムがスムーズに進むよう、また、気になる子どもを把握し支援援助できるよう、学級の人間関係を数値化する効果測定アンケート（資料2）が作成された。この効果測定のよさは経験則に頼らず、客観的に実態把握ができるという点、短時間で個人と集団の様子（資料3）を視覚的にとらえられるという点があげられる。このアンケートについては4～6年生の全学級で9月、12月の2回実施した。

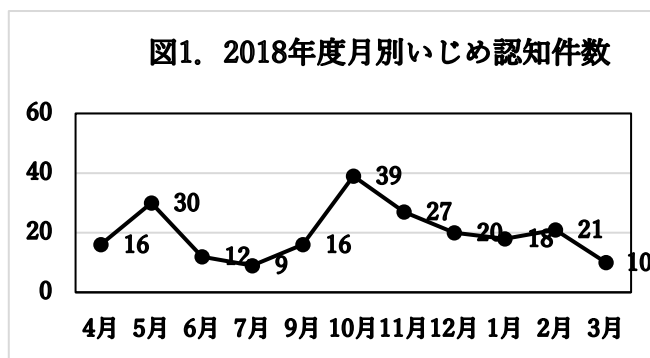
## Ⅲ. 研究の内容

### 1. いじめ認知報告の分析

本校の昨年度のいじめ認知件数は218件であった。これらをいつ、どのような場所で、どの時間帯に、どのようないじめが起きていたのかを図1～5に示した。

#### (1) いじめの起こりやすい時期

図1には、2018年度の月別いじめ認知件数を示している。最も多かったのが10月の39件、次いで5月の30件、11月の27件と続く。5月と10月にいじめ発生のピークがあり、次の月からは減少傾向にある。今年度も5月と1



0

0月をいじめ防止強化月間と設定した。

### (2) いじめが起こりやすい場所

図2には、いじめが発生した場所について示している。2018年のいじめ認知件数218件の内、およそ半数の118件が教室で発生している。次いで運動場、通学路、廊下・階段と続く。いじめ対策をするには、教室のいじめを減らすことが、まず一番重要であることが分かる。

学級経営については、学級担任の視点に任せられる。教師一人ひとりの学級経営に対する考え方も

異なり、お互いが助言し合ったり、話し合ったりすることは難しい。そのため今年度より学級力アンケートを活用した組織的な学級経営に取り組む。学級力アンケートにより、共通の視点で学級の状況を分析し、学年だけでなく、生徒指導主任を含むフリー部など複数の目で学級の状況を知ることができる。私自身、2010年から毎年、学級力アンケートを用いた学級経営に取り組んだ。アンケートの結果を子どもたちにレーダーチャートで示し、大きく上がったところや下がったところを具体的な場面を出し合い話合わせた。そうすることで、学級のよさや問題点を担任だけでなく、学級の子ども全員と共有することになる。そして子どもたちが学級力を高めるための活動を計画し、実行していく。またその実践を担任同士で共有することができれば担任の学級経営力向上にもつながる。担任一人が頑張っただけで学級を作るのではなく、子どもと理想を共有し、一緒になって温かい学級を作っていくことで、いじめを予防することにつながると考える。

### (3) いじめが起こりやすい時間帯

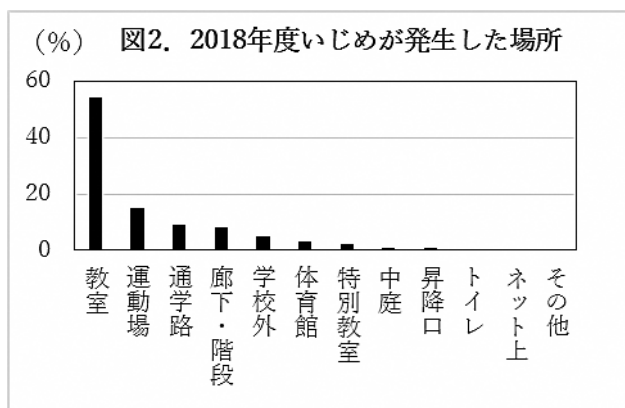


図3. 2018年度いじめが起こった時間帯

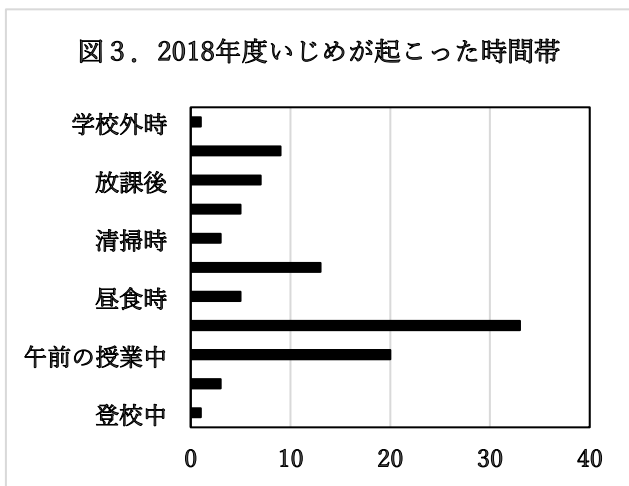


図4. 2018年度午前の休み時間にいじめが発生した場所

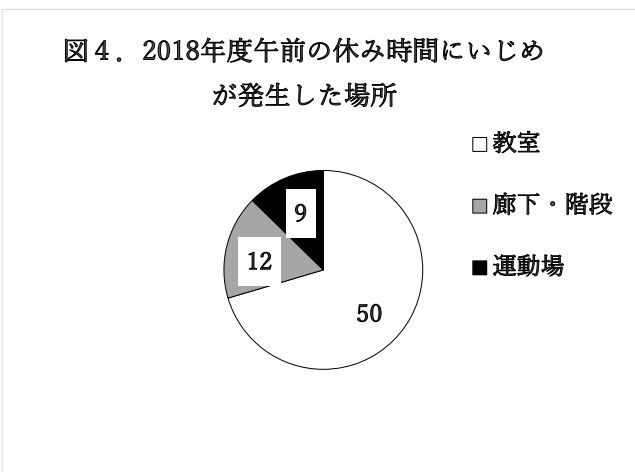
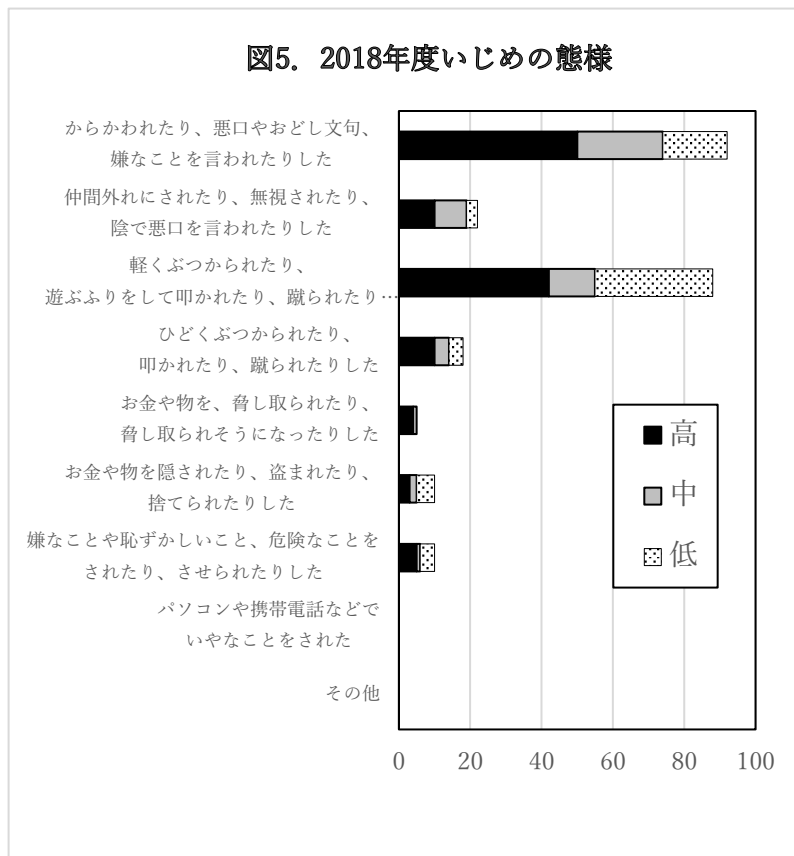


図3には、いじめが起こった時間帯を示している。最も多いのが午前の休み時間、次いで午前の授業中であった。授業中となると学年での授業や全校での集会などが行われないう限り、ほとんどが同じ学級の友だちからいじめを受けたこととなる。では、午前の休み時間はというと、他学年・学級の児童からいじめを受けたケースがある可能性もあると考え、午前の休み時間に発生したいじめの場所を図4に示した。他の教室に用もないのに勝手に出入りしないというルールがあるため、3分の2以上が同じ学級の友だちからいじめを受けていることが分かる。

午前の休み時間に、担任が常に教室に残っているというわけではない。教室という限られた空間の中で、同じ学級の友だちという限られた人間関係の中で起こるということである。早期発見するためには、いじめの傍観者をなくし、いじめが起こった時にいじめを止めたり、先生に報告したり、被害者に声をかけたりするなどの行動がとれる児童を増やすことが重要と考える。

#### (4) いじめの態様

図5には、いじめの態様を示している。最も多いのは、「からかわれたり、悪口やおどし文句を言われたりした」といったコミュニケーション操作系のいじめであった。学年が上がるにつれて増加する傾向にある。次に多いのが「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたり」といった暴力系のいじめであった。うまく自分の思いが伝えられず手が出てしまったり、戦いごっこや遊び半分でたたいたり、するのは低学年が多く、学年が上がるにつれて減るかと思われたが、高学年でも多く見られる結果となった。



### 2. 予防の手立て

#### (1) ピンクシャツ運動

ピンクシャツ運動とは2007年にカナダの学生がいじめに対して、言葉や暴力ではなく行動で意思表示しようと立ち上がった運動である。カナダでは毎年2月の最後の水曜日をピンクシャツデーとし、多くの人々がピンクのシャツを着て、「いじめ反対」のメッセージを送っている。これが世界中に広まり、今では70カ国以上の国で活動が行われている。



写真1. 朝の交通安全立ち番



写真2. ピンクシャツの掲示

今年度からピンクのビブスを身に付けて、朝の交通安全立ち番を行った。児童の安全を見守るとともにピンク＝いじめ防止を啓発するために行った。またいじめ防止強化月間の5月には、ピンクシャツ運動についての全校放送を行った後、ピンクの画用紙をシャツの形に切り取ったカードに「いじめはしません。ゆるしません」宣言をし、一年間掲示することにした。

#### (2) いじめ予防授業

平成26年度教育課題研修指導者海外派遣プログラム研修でフィンランドのKiVaプログラムを知った。このプログラムの中にはいじめがどんなものなのか理解し、どう行動すべきかを考える学習

内容がある。いじめ予防授業として類似実践内容の「これっていじめ」を全学級で実施した。

子どもたちが学校生活を送る中で遭遇しそうな場面を6つ提示した。そしてその場面を「見たことがある」「やったことがある」「やられたことがある」の3つについて聞き、あてはまるものに○をつけさせた（複数回答可）。また「自分がやられたら嫌だ」と思うものについては○をさせた。アンケート結果を見ながら各学年で話し合った。

表1. これっていじめアンケートの結果

(単位：%)

		見た こと があ る	やっ たこ とが ある	やら れた こと があ る	自分 がや られ たら 嫌
1	ドッジボールに入りたいと思ったAさん。みんなに「入れて」と言ったら「いいよ。」と返事がかえてきた。同じようにBさんが「入れて」と言ったが、みんなから返事はかえて来なかった。	37	0	17	83
2	教室で、休み時間になるとふざけあって、たたかいごっこのようなことをするグループがいるが、やられるのはいつもAさんである。しかし、Aさんは笑っている。	50	10	23	77
3	行動が遅れることが多いAさんにみんなできつく注意する。	63	17	23	80
4	休み時間にドッジボールをするが、運動が得意でないAさんは、運動が得意なBさんやCさんといつも同じチームにならない。	33	7	27	83
5	いつも3人で行動していたAさん、Bさん、Cさん。AさんとBさんがCさんに「遊ぼう。」と誘ったが、すぐに来てくれなかった。そのため、AさんとBさんはCさんを無視することにした。	33	3	27	90
6	「最近、Aさんのこと腹立たへん?」「私もそう思うわ」とAさんのいないところで言っている。	90	3	40	90

表1は、2年生のある学級のアンケート結果である。いずれの項目もやったことがある人数よりもやられたことがある人数の方が多い。「自分がやられたら嫌だ」という項目については、100%の項目は一つもないことからいじめがいけないということは誰もが分かっていることなのに感じ方のずれでいじめが起こってしまうのだろうということを共通理解した。また「2の場面のようにAさんが笑っているから遊びだと感じてしまう子がいる。表面上と内心とは違うことがあることに気付かせなければいけない。」や「5の場面のように誘って来てくれなかったのだからやり返しても仕方がない考える子がいる。」ことを念頭におきながら授業を組み立てていった。本時では2つ～3つのアンケート結果を提示し、いじめかいかじめでないのかを話し合せた。そして感じ方のずれについて「本当に楽しんでいるのかな」と問いかけたり、自分の経験を振り返らせたりすることで多様な考え方、とらえ方があることに気付かせていった。最後に森田氏のいじめの四層構造論を参考にしたいじめの構造図（資料4）を示し学級に掲示した。

### (3) 職員研修

夏季休業中に本校の職員を対象に生徒指導研修を行った。前半を「いじめを増やすためにはどうすればよいか」、後半を「9月からの学級力向上を目指して」についてグループ討議した。いじめを

増やすために考えると具体的で現実的なアイデアが浮かぶ。仲の良い者同士を同じ班にする。トラブルが起こっても見て見ぬふりをする。みんなの前でひどく叱る。などいじめを増やす要因について考える作業は、そのままの環境を改善すればいじめを抑制することができるかにつながる。各グループで話し合っ出された意見をまとめたものが（資料5）である。9月からの学級力向上については、教職4年目までの担任が先輩教員に相談する形で進めた。相談する際には、学級力アンケートの結果を示したレーダーチャートを示しながら7月までの学級経営や普段悩んでいることを話し、9月からの学級経営のアドバイスをしてもらうようにした。具体的には「学級目標があるにも関わらず、目標パワー（今、みんなで頑張る目標がある学級だ）が低い。どうすればいいでしょうか。」という悩みに対して「学級目標を意識できるように朝から学級目標を唱和したり、学級目標を意識した子どもの姿をしっかりとほめたりすることが大切です。」などアドバイスがあった。

### 3. 早期発見の手立て

#### （1）学級力アンケート

学級力アンケートの結果を子どもたちに示し、学級の強みや弱みについて話し合わせた。9月の学級力アンケートの結果は5月の学級力アンケートの結果と重なって表示されるので、子どもたちもどうして上がったのか、下がったのかを具体的な姿を想起しながら話し合うことができる。みんなで頑張ることを決めて取り組む学級が見られた（資料6）。また学級力を高めるための係活動を提案させて、それぞれの係で学級力を高めようとする学級も見られた（資料7）。

5月、9月、12月にとった学級力アンケートの結果といじめ認知件数との関連を明らかにすることでいじめを未然に防ぐことができるのではないかと考え、いじめ認知件数と学級力アンケートの8つの項目の内、4つの項目との相関を調べた。4つの項目とは、

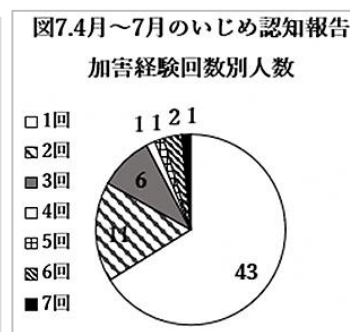
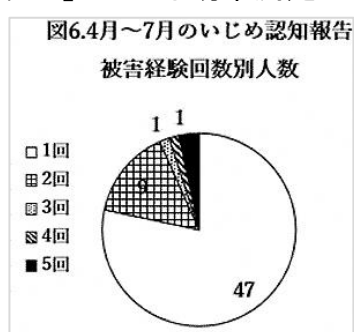
- ⑤安心して話せる雰囲気のある学級だ。
- ⑥助け合ったり教え合ったりする学級だ。
- ⑦学校や学級の決まりを守って、みんなが気持ちよく過ごせる学級だ。
- ⑧勉強の約束を守って、一生懸命勉強する学級だ。

である。しかしいずれの項目においてもいじめの認知件数との相関は見られなかった。学級の実態を把握するために8つの共通の視点で見ることは、職員研修で行ったような若手教員が先輩の教員から具体的なアドバイスがもらえるといった利点はある。しかし、レーダーチャートの大きさや形を比べることはできないし、するべきではない。子どもたちの学級に対する見方が鋭くなれば、必然的にレーダーチャートは小さくなる。学級によって子どもたちの学級に対する見方も当然違うし、担任が日頃子どもたちにどのように声をかけているかによっても異なる。理想を高く掲げている学級であれば、学級の現状をまだまだ達成できていないと判断し、低く評価するであろう。

ただ今回、生徒指導主任として早期発見できるよう学級力アンケートの結果を渡す際に、蛍光ペンチェックし、注目してもらったのは「⑤安心して話せる雰囲気のある学級だ」の項目に3：あまりあてはまらない、4：まったくあてはまらないと答えた児童である。ぬくもり週間に担任が学級の児童と一人一人と懇談をする際、3や4と答えた児童がいじめられているかもしれない。円滑な友人関係を築けていないかもしれない。また自分は円滑な人間関係を築けてはいるが、学級内で居心地の悪そうな児童を気にかけて低い評価をしているかもしれないといった視点で懇談に臨んでもらえるようにした。

## (2) 「かわさき共生＊共育プログラム」による効果測定

図6は、4月～7月のいじめ認知報告を被害経験回数別の人数で示している。4か月の間で被害経験を2回以上している児童は13名であった。また図7は、4月～7月のいじめ認知報告加害経験回数別の人数で示している。4か月の間で加害経験を2回以上している児童は22名であった。学



級力アンケートによって学級の状況をよくしていこうとする取り組みともう一方で何度も繰り返し、いじめに関与してしまう児童について何らかの特徴を捉え、支援していかなければならない。そこで4年生以上に実施した「かわさき共生＊共育プログラム」の効果測定の結果を見るといじめの被害経験を2回以上している子の中には、Dの退行傾向・要支援群に属している子が少なからずいることが分かった。4年生以上の6名中、3名がDの退行傾向・要支援群に属していた。つまりソーシャルスキルが他の児童に比べ低いことが分かった。

そこで4年生と5年生から各1学級を対象にソーシャルスキルの授業を2時間ずつ実施し、いじめ認知報告（加害・被害）の対象児童や学級の児童全員に対してどのような効果があるかを検証することにした。検証の方法として9月のかわさき共生＊共育プログラムの効果測定アンケートのスキル（①解決スキル②言語的スキル③感情統制スキル④気遣いサポートスキル）の数値の変容を見る。

ソーシャルスキルの授業については「クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法」を参考にし、「相手の気持ちを想像しよう」や「感情をがまんできる人になろう」についての指導を行うことにした。

## IV. 研究の成果

### 1. いじめ予防の手立て

#### (1) ピンク＝いじめ反対の浸透

人権週間には、各学級で人権目標が話し合われた。1年生の担任から「ピンクシャツをみんなで着ればいい。」という声が上がったと報告を受けた。毎朝、ピンクのビブスを着て交通立番をすることでピンク＝いじめ反対＝人権を大切にするといった意識を子どもたちが持てるようになった。

#### (2) いじめの予防授業

いじめは「考えのずれ」によって起こること。いじめは加害者・被害者だけの問題ではなく、傍観者を無くし、いじめを何とかしようと行動する子どもを育てることが大切であることを共通理解することができた。

#### (3) 学級力アンケート

学級力アンケートの8つの項目とのいじめ認知報告についての関連を見ることでどこを高めればいじめ抑止になるかが分かると考えていたが、その関連性を残念ながら見つけることはできなかった。しかし、4月から12月までのいじめ認知件数で一度も報告が挙がらなかった学級があった。その学級は学級力アンケートを毎月行い、結果をもとにどうすれば学級がよくなるか子どもたちが主



役となって話し合いを重ねていた。そして教室には毎月のレーダーチャートをもとに話し合った跡（資料8）が掲示されていた。9月までは、話し合いで決まったことを先生の字で書かれていたが、10月からは、子どもの字になっていた。掲示物を見るだけでも子どもたちの成長が見られた。いじめがなかったのは偶然かもしれない。ただ学級の状況を子どもたちが話し合っている様子を見る限り、とても温かい雰囲気を感じた。自分たちの学級は自分たちで話し合ってよくしていくという経験を積むことは、今後出会うかもしれないいじめの問題にも向き合い、話し合って解決できるのではないだろうか。

## 2. いじめ早期発見の手立て

学級力アンケートや「かわさき共生＊共育プログラム」の効果測定の結果から学級の状況や人間関係を数値で客観的に見ることで普段子どもたちの様子を見ているだけでは気づけなかったことに気づくことができる。実際に担任から普段の授業や友だちとの様子から判断し、今の学級の状況に満足していると感じていた児童がアンケートの結果では、自分の想像に反して学級や友だち関係に不満を持っている結果として表れていた。アンケートを誤って答えているのではないかと本人に確認したところ、実際には、満足していなかったということが分かった。

また担任の代わりに自習に入った学級の様子で気になった児童がいた。すぐに「かわさき共生＊共育プログラム」の効果測定の数値を確認し、学級に入った時に感じたことと数値を見て感じたことを担任に伝えることもあった。学級の状況や人間関係を数値化することで担任だけでなく学年、教務など複数の目で対応していくことが可能になるのではないかと考える。

表2には、4年生の学級において授業前後のスキルの平均と標準偏差を学級全体と対象児童4名（いじめ認知報告に2回以上）について示した。授業前後の平均値の差が統計的に意味のある差かどうかを検証するためt検定を行った。学級全体の解決スキルでは1%水準で言語スキルにおいては5%水準で有意な差が見られた。感情統制と気遣い・サポートの平均値には有意な差は見られなかった。対象児童4名では解決スキルのみ5%水準で有意な差が見られた。

表2. 4年生の学級における授業前後のスキルの平均値

	解決スキル		言語的スキル		感情統制		気遣い・サポート	
	学級	対象児童4名	学級	対象児童4名	学級	対象児童4名	学級	対象児童4名
授業前（平均）	15.6	12.5	16.0	14.0	12.7	7.25	17.5	14.0
標準偏差	2.77	2.65	3.06	4.97	2.8	2.22	2.35	0.82
授業後（平均）	16.9	14.5	17.2	18.0	13.1	9.75	17.8	16.0
標準偏差	2.45	2.52	2.52	1.83	2.72	4.19	2.22	2.45
有意差検定の結果	p < 0.01	p < 0.05	p < 0.05	ns	ns	ns	ns	ns

4年生の学級で有意な差が見られた要因として授業後にも学んだことを実生活で活かせるように学んだことを掲示したり、スキルが必要な場面で個別に声をかけたりしたことが考えられる。実際、4年の担任はこちらが提案したソーシャルスキルの授業の効果を実感し、次も児童の実態に合ったソーシャルスキルの授業ができないかと本を借りに来る姿が見られた。対象児童に焦点を当てた授業を行ったことで対象児童だけでなく学級全体のスキルも高まった。対象児童はDの退行傾向・要支援群のままであったが、Aのポジティブ活躍群に近づいた（資料9）。各学級の12月の学級力アンケートや「かわさき共生＊共育プログラム」の効果測定アンケートを機械的に入力していた際



に目にとまったのが、運動会で応援団のリーダーとして活躍していた児童の「私はクラス全員でまとまり行動することが好きです。」という質問に対して「まったくそう思わない」と答えていたことである。リーダーとして活躍しているのだから当然、まとまって行動するのは好きだと考えていた。他の質問項目も気に入り、28項目すべての質問を入力し、気になる質問項目に低い評価をしている児童について担任に知らせることとした。気になった質問項目は以下の4つである。

解決スキル	④話や遊びの仲間に、気軽に入れてもらえることができます。
言語的スキル	⑩友だちの頼みでもいやな時はいやですと言えます。
信頼他者	⑫友だちは、困った時に声をかけてくれると思います。 ⑬クラスの中に頼れる友だちがいます。

これらの項目に低い評価をしている児童は、学級内において円滑な人間関係を築けていない可能性がある。次年度はいじめ防止強化月間の5月までに学級の人間関係を把握し、いじめを未然に防ぐ有効な手立てとなるだろう。

### 3. いじめの態様

昨年度と今年度の12月までのいじめ認知件数を同集団で比較した。

表3. 2018年度と2019年度の12月までのいじめ態様

いじめの態様	冷やかし等		仲間外れ、無視等		軽く叩かれる等		ひどく叩かれる等		金品たかられる		金品盗まれる		嫌なことさせられる		ネット上		その他		合計	
	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度	二〇一八年度	二〇一九年度
1年	12		4		30		0		2		3		1		0		0		52	
2年	7	3	0	1	13	8	1	2	0	1	2	3	2	2	0	0	0	0	25	20
3年	7	9	2	10	17	7	2	0	0	0	3	4	2	2	0	0	0	0	33	32
4年	7	5	0	6	5	7	1	2	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0	16	21
5年	11	10	4	8	6	11	2	3	1	0	0	4	0	2	0	1	0	0	24	39
6年	21	8	6	4	25	15	3	4	3	0	1	2	5	1	0	0	0	0	64	34

いじめ認知件数を減らすことが目的ではないが、6年生のいじめ認知件数が半減している。これは、4年生以上に教科担任制を実施し、複数の目で子どもたちを見たことに加え、学級力アンケートにより、学級の状況を共通理解できたことが考えられる。6年のある学級では、冷やかし、軽く叩かれる、もの隠しといったいじめが7月まで多発し、子どもと担任の関係も決して良い状況ではなかった。しかし、夏季休業中に担任が子どもたちとの関わりを見つめ直すきっかけをつかみ、学級は落ち着くようになった。学級力アンケート（資料10）や「かわさき共生\*共育プログラム」の効果測定の結果（資料11）からも学級の状況が好転したことが伺える。また「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。」については、2～6年の学年で昨年度よりも減少した。「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり・蹴られたりする。」4年生と5年生においては増え、2・3・6年生は減少した。それぞれの学年の特徴をとらえ、次年度のいじめ予防の手立てを考える上の材料としたい。

## V. 反省と今後の課題

4年生以上の学級については9月から「かわさき共生＊共育プログラム」の効果測定の結果から学級の状況や人間関係を数値で客観的に見ることができたのは、いじめを未然に防ぐ手立てとして大変有効であったと思う。また4年生以上は、学年で教科担任制を実施し、一人の担任の目だけでなく複数の目で学級を見ることができた。それぞれの放課後の学年会においても気になる児童について共通理解し、どのような手立てが打てるか話し合っている姿が見られた。しかし3年生以下については、いじめを未然に発見する手立てを学級力アンケート以外では講じることができなかった。3年生以下の学級では、まだまだ担任一人の目で学級経営していく傾向が強い。学級力アンケートを有効に活用し、2年生の学級のように毎月、レーダーチャートをもとに子どもが主役となり、話し合いを進めていき、それを学年でも共有していくことが今後必要になってくる。

また暴力の低学年化についても対策を講じなければならないだろう。文部科学省の調査をもとに作成された小学校学年別加害児童数（資料12）に関して2006年度比で1、2年生において19.2、12.7倍と他の学年を比較しても顕著な増加が見てとれる。情動のコントロールに苦戦し、暴力行為を繰り返す傾向が強まっているのが特徴と言える。これまでは幼稚園からの接続として「小1プロブレム」が論じられてきたが、それだけでは説明がつかなくなっているのが現状と言える。今年度本校の1年生においても「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり・蹴られたりする。」ほどの学年よりも発生件数が多く、本校でも「暴力の低学年化」が見られる。今後、この荒れを未然に防ぐために学校としてどのような体制で臨むのか検討していかなければならない。

## VI. 引用文献・参考文献

1. 「いじめを生む教室 子どもを守るために知っておきたいデータと知識」（荻上チキ著・株式会社PHP研究所・2018年）
2. 「平成26年度 教育課題研修指導者海外派遣プログラム研修成果報告書 生徒指導・教育相談の充実 フィンランド（D-1団）」
3. 黒瀬慈幾：小六 教育技術、小学館、2010 9月号 学級経営に生かす教育プログラム 執筆／川崎市立小学校児童指導研究会
4. 「クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法」（岩澤一美監修・株式会社ナツメ社・2014年）
5. 「データが語る①学校の課題 学力向上学級の荒れいじめを徹底検証」（河村茂雄著・株式会社図書文化社・2007年）
6. 「小学校から高校まで 月刊生徒指導 荒れる子ども ～小学校における荒れを再考する～」（小沼豊著・学事出版株式会社・2019年）